
要

riz

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】 要

【Nコード】

N8866U

【作者名】

r i z

【あらすじ】

人みしりの激しい陽菜の恋の物語

入学式

「ふう・・・」

玄関に立ち降り続く豪雨を見ながらため息をつく。

「いつてきます」と母に告げる。

今日は県立八塚^{やつか}高校入学式。せつかくの真新しい制服が雨に濡れると思うとうんざりする。

雨の中、高校指定のカッパを着て約5kmの道のりを自転車で進む。自転車で20分ちよつと。これから毎日この道のりをコギコギすることになる。

学校に着くころにはカッパを着ていてもずぶ濡れだった。

電車通学の人たちも駅から高校までの道のりですっかり濡れていたの、みんな入学式というのにうかない顔をしている。

昇降口にクラス名簿が張り出されていた。

1年12組。1階の昇降口に一番近い教室だった。

この近辺の高校では一番のマンモス校で、同じ中学からも100名近く八塚高校へ入学していたが、中学も10クラスあり、さらに私は中学2年のときに他県から八塚へ引っ越してきていたので知人が少ない。

中2の時も、中3の時も、人みしりの激しい私はクラスにはなじめなかったが、入部したブラスバンド部では親友ができた。弱小ブラスバンド部だったので、練習はのんびり和気あいあい。人みしりの私でもなじむことができた。

八塚高校にはマンモス校だというのにブラスバンド部がなかったの、部長の奥田舞香ちゃん以外は他校に進学した。舞香ちゃんは3組。離れた教室で階も違う。

教室に入ると黒板に出席番号順に席に着くよう指示が書いてあった。机を見ると出席番号が書いてある。

出席番号34番、内田陽菜^{はるな}。女子で4番目なので前から4番目の席だった。

鞆からタオルを出し、濡れた体を拭きながら周りを見渡してみたけど、やっぱり見覚えのある顔はない。

このクラスではうまくやっていけるだろうか？と不安になる。

しばらくするとチャイムが鳴り、いかつい男の先生が入ってくる。

見るからに体育会系の担任の芝原先生は、予想通り体育担当。

担任が簡単に自己紹介を済ませると入学式のため体育館へ移動した。

校長の長い挨拶のあと、在校生代表の挨拶、入学生代表の挨拶と続く。

「受験の時の成績トップが入学生代表挨拶なんだって」と後ろの方でひそひそ声が聞こえる。

遠くてはつきり顔は見えないが、中肉中背の普通ぽいの男の子が代表らしい。

こんな平凡な子でもトップになれるんだ……

心の中でつぶやいた。

入学式の後、教室に戻り、必要な書類を記入して今日は終了。

書類を記入しようと思ってかばんの中を探っても、筆箱が見当たらない。

「やばっ、筆箱忘れた、どうしよう……」

小学校のころは『忘れ物の女王』と言われていた私は、いまだに忘れ物、ケアレスミスが治らず、入学式の日までも忘れ物をしていたらしい。

あせつて「ごそごそしていると後ろから「どうしたの？」と声をかけられた。

「実は筆箱忘れちゃって・・・」とつつむいて真っ赤になって答えた。

「じゃあ、ボールペン貸したげるよ」と快く貸してくれた。
つつむいたまま小声で「ありがとう」と言っ受取取る。

記入が終わったので振り向くと「ねえ、ねえ、内田陽菜って名前なんだよね、私、内田真央まおっていうの、よろしくね」と元気よく声をかけてくれた。

「ありがとう」と言っペンを渡すと「同じ内田って名字だよね、陽菜さん」って呼んでもいい？」と聞かれたので「う、うん、いいよ」と返事をした。

初対面の人に名前と呼ばれるのなんて初めてでドキドキした。

『内田』はよくある名字だけど学年に1人か2人ぐらいいるかいな
いから、今まで同姓の人と同じクラスになったことがなかった。
真央が「実は私、中3の時、内田陽菜はるなって子と同じクラスだったんだあ、そして私のお姉ちゃんはるなは晴菜はるななんだよ、うちだ はるな」
って名前に縁があるみたい、このクラスに知り合いいないし、友達
になってくれる？」と笑顔で聞いてきた。

こんなに早く友達ができると思わなくてびっくりしたけど、真央の
笑顔につられて「うん」と答えていた。

そういえば母が八塚よりも2ランクレベルの高い八坂高校の合格発表
表を見に行った近所のおばさんに「陽菜ちゃん八坂高校受けたの
？」って聞かれたって言ったけど、真央の同級生だった陽菜ちゃん
は八坂に合格したらしい。

教室を出ると、雨はやんでいた。

入学初日から友達ができるなんて幸先がいい。

「正樹を忘れられるかなあ」
憂鬱だった心が少し軽くなった。

正樹

福田正樹。小学校の3年、4年の時の同級生。身長は私ぐらいで髪がサラサラで二重の男の子。成績はよく、運動はちよつと苦手。

私は小学校の時は音楽と体育が大好きで「1日中音楽と体育の授業だったらいいのに」って思うぐらい元気いっぱいの子。女の子と言いつつも一人称は「俺」。自分が女であることを嫌で嫌で仕方なかった。「女の子なのにそんな危ないことして」、「女の子なんだからたまには家の手伝いでもしなさい」。こんな言葉を聞きたびに「なんで男の子に産んでくれなかった」と思わずにはいられない。

正樹とは席替えで隣の席になってから話すようになった。このころはまだそんなに人見知りも激しくなく、すんなり話すことができていた。

忘れ物ばかりしてる私はしょっちゅう隣の正樹に授業中教科書を見せてもらったり、鉛筆や消しゴムを借りていた。

「福ちゃん、教科書見せる」、「お前、また忘れたのかよ、ばっかじゃねーの」と言われて「うっせーなー」なんて答える私にも結局は見せてくれる。

なかなか一輪車に乗れなかった正樹に乗れるようになるまで教えてあげたり、男の子だけとお姉さんと一緒にピアノを習っていたので、音楽の話でも盛り上がったリ、少しずつ正樹に惹かれていった。

小5になるとクラス替えがあり、正樹とは別々のクラスになってしまった。私は1組、正樹は3組。

3組には仲のいい未来ちゃんみらいがいたのでちよくちよく遊びに行つては正樹の顔を見るのを楽しみにしていた。

木枯らしが吹くころ、昼休みに3組の前を通るとなにやら騒がしい。

なんだろうと思って覗いてみると「ヒュー、ヒュー」「おーっと、来たー」「グッドタイミング！」と言われた。よく見ると正樹が珍しくクラスのやんちゃグループの男の子たちに囲まれている。どうしたんだろうって見ていると、未来ちゃんに袖をひっぱられ「福田君が陽菜ちゃんのこと好きなんだって。冷やかされてるよ」と告げられた。ちらりと正樹の方を見ると、真っ赤になってうつむいている正樹をやんちゃグループの男の子たちが無理やり背中を押して扉の方へこようとしていた。

本来なら「うつせーなー、いちいちガタガタ抜かすんじゃないー」ってやんちゃグループの男の子相手にケンカでも始めていただろうに、なぜかできなかった。

気がつけばダッシュで1組に戻っていた。

「福ちゃんが俺のこと好きなんて・・・」

信じられなかった。こんな俺女の私が男の人に好かれるなんて夢にも思わなかった。

それからも3組の前を通るたびに冷やかされるので、できるだけ3組の前を通らないで卒業まで過ごした。

好きなのに話すことはもちろん、顔を見ることがすら難しくなって苦しかった。

その後、一言もしゃべることもなく、視線を合わせることもなく小学校を卒業してしまった。

小学校の東側と西側で別の中学に進学するためもう会うことはなかった。

1度だけ文房具店で見かけたときに目が合った。3組のおとなしいグループの男の子たちと一緒にいたけど、目をそらされてしまったので、何も言えなかった。

中1の8月。父から「来年の春から県外の八塚市に転勤することになった。新しい家を建てるから、自分の部屋を作ってやるぞ、喜べ」

と告げられ、絶望した。

もう二度と正樹と会えない。偶然、街で見かける機会すらないと思うとつらかった。

中2からは八塚南中学へ転校した。

転校を機に俺女を卒業することにした。一人称を「私」にした。もう正樹を忘れたかった。新しい自分になりたかった。

そう思うとなかなか本当の自分を出すことができなくて自分が自分でなくなっていく気がした。

そんな私をプラスバンド部のみんなは温かく迎えてくれて、部にいるときは少しだけ本来の元気な姿を見せることができるようになっていた。

特に、副部長の森桜子とは仲が良くなった。忘れられない正樹のことを話すことのできる唯一の友達だった。

正樹のことはもう忘れようと思って引越してから1度手紙を書いたけど返事はなかった。

正樹は本当に私のことが好きだったんだろうか？本当に好きだったとして、私はどうしたかったんだろう・・・もう会えないのに。

新しい自分に変わりたくても変わらない。

なかなか変わらない自分が嫌でどんどん深みにはまっていった。

気がつけば元気とは程遠い知らない人に話しかけられるとうつぶいってしまうほど恥ずかしがり屋の「女の子」になってしまっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8866u/>

要

2011年12月2日06時47分発行